

国際政治ドキュメント

炎と氷

大森 実



炎と氷

大森 実

集英社

大森 実 おおもり みのる

一九二二年神戸市生まれ。神戸高商卒。毎日新聞入社後、ニューヨーク、ワシントン各支局長をへて外信部長。カルフォルニア大学外人記者賞、ポイン賞、日本新聞協会賞を受賞。毎日新聞退社後、現在週刊新聞「東京オブザイバー」を主宰。主な著書「第三の引金」「大統領の紋章」「天安門炎上す」等。

炎と氷

一九六七年三月二十五日 初版印刷
一九六七年四月五日 初版発行

定価三七〇円

著者 大森 実

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区神田一ツ橋二ノ三

電話 東京(三六)六一一

振替 東京一五六五三

印刷所 大日本印刷株式会社

著者との了解により検印を廃止いたします。

まえがき

こんな事態——極東で米中が衝突し、核の引金に手がかかるなど、考えただけでも鳥肌の立つ想定だが、その可能性は否定できない。

否定できぬどころか、現実の恐怖として、そういう事態に向かつて、極東情勢——ベトナム戦争の拡大エスカレーションと中国の革命の悪化は、日一日と悪い方に発展しつつあるのだ。

ジョンソン米大統領は一九六八年の大統領選挙までに、ベトナム戦争を終結せねばならぬ大きな課題を背負っている。

そのためには、六七年中にベトナムを何とかせねばならぬが、何とかしようとしても、相手のある戦争である。自然、力にモノをいわせ、腕づくで組伏せたい方のジョンソンは、口ではやさしいことをいいながら、次第に戦争をエスカレートしつつある。

中国の毛沢東も一九六六年十二月、七十三歳の誕生日を迎えて、いまや老いの一徹である。死ぬまでに、プロレタリア革命を成し遂げてみせる、と彼が書いた「遺書」の実現に向かつて、きついことをやり出した。

江青夫人が表面に躍り出し、暴動が頻発している。林彪^{りんびょう}という軍人が革命の赤い旗を振っているが、軍人がサーベルをがちゃつかせるとき、歴史は常に外への緊張を生み出してきた。

歴史を無視してはならない。

私は未来を予想するとき、まず、歴史の復習から筋立てを行なうようにしている。

このストーリーは虚構である。こういう事態の発生がありうるという「予言」でもある。しかし、私はこのストーリーの「虚構」の中に、出来るだけ真実のニュース材料と情報と史実を使うことに心がけた。だから、これは、いわゆるSFのたぐいではない。国際政治小説として読んでゆかれる読者の興味の中に、自然に、われわれの周辺をとりまく国際情勢の現実と歴史が、ご理解願えることを望んでいる。

一九六七年三月十三日

渋谷松濤にて 大森 実

目次

まえがき	1
一九六七年十二月三日	9
五大国巨頭東京入り	9
毛沢東入京	16
一九六七年十二月四日	29
十八本のポール	29
虚ろな巨頭席	44
第二のキューバ危機	54
回転ラウンジの青い椅子	70
一九六七年十二月五日	80
外電テレプリンターの第一報	80

十五階の仏ソ巨頭会談	110
シアヌーク元首飛来す	91

一九六七年十二月六日 137

周恩来との単独会見	137
紋章に託すジョンソンの決意	151
和平への快気炎	164
機熟すアジア首脳会議	179
月のないベトナムの夜	195

一九六七年十二月七日 208

黒い和服の江青夫人	208
天安門炎上す	217
南京の悲劇	218
雌鶏、暁を告げる	218
宮廷革命の匂い	220
総工会の解散	221

白衛兵と紅衛兵……………222

世界最大の特ダネ……………225

毛沢東死亡説……………243

米中激突の危機……………253

一九六七年十二月八日……………263

第三京浜国道の霊柩車……………263

装幀 生原嘉成
さしえ 土井 栄
題字 佐藤 皓

写真提供

アメリカ大使館 ソ連大使
館広報課 イギリス大使館
サン・テレフォト キース
トン通信社 共同フォト

炎
と
氷

一九六七年十二月三日

五大国巨頭東京入り

思わずオーバーの襟を立てた。

うそ寒く、ひりりと痛いような風が、私の頬を刺した。

戦後、チャーチル英首相は、欧州に吹きそめたこの冷い風を、鉄のカーテンから吹きつける
コールド・ウォーの風と呼んだが、いま欧州には、東西融和の暖風が吹いている。冷い風は、
アジアだけに嵐を呼びおこしつつあるのだ。アジアは欧州より、百年の時代の遅れがある。だ
が、アジアの嵐は、世界を荒廃させる破壊力をもっている。

自衛隊のシコルスキー・ヘリコプターが、やかましい音を立てて、とんぼのように舞い下り
てきた。固いアスファルトの滑走路の横にびたりと停止すると、風防ガラスを開いて、顔見知
りの芥川一佐が下りてきた。

彼は軍靴の音をこつこつ立てて、私の方に歩み寄ると、白い手袋の右手を、

「やあ……」とあげて、挙手敬礼の姿勢をとると、

「いよいよ、やってくるよ」といった。

「どこまで来たか？」ときくと、

「もう、そこまで来てる。あと十分かな」と腕時計をみた。

私は小型のウォーク・トーカーを、オーバーの内ふところに抱えこんでいたが、こいつがさつきから間断なく鳴りつづけた。

私が主宰する「東京オブザーバー」紙の渋谷本社から、デスクの小栗正吉が、自衛隊の連絡用電波の波長に合わせて、傍受した無電情報に刻一刻と、空港の車に流してくれているのだ。

小栗のかわいたタミ声が叫ぶ。

「毛沢東機、九州海岸の上空で、自衛隊機とランデブー。東京に向かった」

「音の小栗」と仲間が呼ぶが、今日は彼も、はりきって元気のいい音を出す。彼ののどは、声ではなく、音を出すのだ。前の新聞社に、いっしょにいた当時、彼がデスクの椅子につくと、とたんに外信部が騒々しくなった。「音の小栗」の真骨頂だが、彼は、社会部時代、大阪に勤務中、金閣寺を焼いた学生僧に、ざんげ日記を書かすため、毎日、社費で肉どんぶりを差入れていたが、デスクに、

「この国賊め！」と怒鳴られ、

「馬鹿デスク！」と怒鳴り返した。その声が沢庵和尚よりでかかったといふので、^ノ音の小栗」と命名されたのだ。

十二月三日早朝、北京を発った毛沢東専用機は、一足飛びに九州に接近した。毛沢東機を出迎えるため、自衛隊の旧式戦闘機編隊二十機が、中国空軍機と接触遭遇し、九州沖上空で翼を返し、毛専用機を先導しながら、コースを東にとったのだ。

芥川一佐が、無言のまま、空港滑走路に整列し終わった自衛隊儀仗兵^{ぎじょう}の方へひき返してゆくと、私の背の方向、空港の送迎デッキの上で、ワッと喚声があがった。

振り向くと、その喚声は、デッキの上に陣取った二つのグループから、同時にわき起こったものだった。

「帰れ！ 毛沢東！」

ひどく挑発的で、国賓を迎える場としては、はなはだおだやかでないが、このノボリが、ひときわ目立っていた。十メートルの丈はあろう。白い布地に墨で、黒々と毛沢東ゴー・ホームのスローガンを躍らせていたが、国府擁護同盟の連中である。

そのすぐ隣りに、それぞれ黒シャツで、この寒空にオーバーも着ず、赤腕章を巻いた黒虎大政奉賛会の若いものもいた。この二つのグループが、俗にいう、右翼グループだ。

デッキの左はしが左翼グループ、一週間前、北京を訪問して、^ノ日中共同の敵、アメリカ排撃^ノの日中青年決議を発表し、毛沢東から^ノ国際紅衛兵^ノの腕章を巻いてもらって、帰国した

ばかりの、日中友好学生団のグループである。

彼らが「東方紅」を齊唱すると、黒虎大政奉賛会の若もの二百名が、対抗的に、右腕を天空につきあげ、蛩声を張りあげて、中国人が嫌う「蘇州夜曲」や「支那の夜」を齊唱した。

「気をつけッ！」

自衛隊儀仗兵の鋭い号令が私の耳に入った。

日本国首相陸奥^{むつ}寿一郎を乗せた、黒い国産のセダンが、白バイに先導されて空港に入ってきた。

小栗のダミ声が、ウォーキー・トーカーの中で吼えた。

「中国のミグ21戦闘機が、岡山上空で、日本自衛隊のボンコツ戦闘機編隊を追いこした。毛沢東機、間もなく神戸上空を通過」

「了解！」と答えた。私はクスツとにが笑いした。出迎えのランデブー機が、毛専用機を護衛している中国空軍のミグ戦闘機に追いこされるとは失態である。

国産の黒いセダンから、陸奥首相が降り立った。瘦身^{そうしん}白髪^{しろかみ}の品のよい老紳士だが、汚れに染まぬ絹のハンカチの清潔な政治の上に、日中復交による極東の平和回復という、雄大なビジョンを買われて、国民の圧倒的支持を背景に、四か月前に首相の地位についた。

政權担当直後、彼がはなった第一声が、

「私は百日以内に、ベトナム戦争を終結させる。そのため、老骨を国に捧げたい。九十日以内

に、東京で巨頭会談を開いてみせる」

と、豪語したが、彼の公約にウソがなかったことを、いよいよ、明日から実証できそうな段階に入ったのだ。

彼は、陸奥宗光の姻戚関係にあった。彼がいちど、私に語った言葉を覚えていた。

「明治百年の日本外交を顧みて、陸奥宗光は立派だったね。条約改正をやつてのけたのだからね。もう一人、立派な外交をやつた政治家がいる。それを誰だか知ってるか」

「?.....」

「小村寿太郎だ」

「小村?」

「彼は、国民に怒られて、家を焼かれたが、ポーツマス条約に調印した。勝つたはずの日露の役で、あの条約は国民には不満だったかもしれないが、当時の世界情勢では、あれ以上、戦わぬ方がよかった。政治家は、巨大な世界の歴史の中で生きねばならぬね」

「もう一人いるのでしょうか」と私がからかうと、陸奥首相は、にっこり笑つて、

「私だといいたいのかね」

陸奥首相も、太平洋の日米友好関係の安定したアグラの上に、日中友好の扉を開くことが、日本国の百年の大計だと信じているのだ。

陸奥首相は、一年と少し前、松村謙三代議士を軸とする自由党の日中連絡パイプ役の、後継

者に選定されかけたことがある。

松村が、この意向を胸にたたんで訪中したとき、周恩来や廖承志アジア・アフリカ連帯委員長に、この旨を伝えると、

「それは結構なことだ。わが方に、何ら異論はない」という返事だった。

ただ一つ、中国側は、陸奥を後継者とする条件に、陸奥が佐藤政権の閣外に出ることを主張した。

陸奥はこの条件に躊躇した。勇気がない男だ、と松村からも皮肉られたが、陸奥には、どうしても一度は政権をにないたい野望があった。

間もなく、中国では紅衛兵革命の嵐が吹きまわった。林彪対劉少奇の、権力闘争が表面化した。サーベルの「突出」、つまり政治に対する軍事優先の中国革命の前途は多難であった。政権担当の野望に燃える陸奥には、サーベル政治の林彪にコミットしてしまふ「勇気」が、軽率な蛮勇とは思えなかったのだ。

東京巨頭会談への陸奥の招待客は、豪華な顔ぶれである。すでに、昨夜までに、四人の世界の巨人たちが入京していた。

一昨日早朝、コスイギン首相を長とするソ連の二百三十七名の代表団は、ナホトカから原子力船スプートニカ号を横浜へ入港させ、東京のホテル・ニューオータニに陣取った。

ホテル・ニューオータニは、門脇元駐ソ大使が社長をしている関係からか、昨夏グロムイコ